教職課程広報誌

教職課程センターだより 第16号

発行日　2016年11月21日

大学も「コンテンツベース」から「コンピテンシーベース」へ

―「大学の学校化」が止まらない―

教職課程センター長　山本敏郎

3ポリシーの作成に関わった先生方は、ディプロマポリシー（DP）を「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」というフレームで作成したことや、この観点をもとにカリキュラムツリーを作ったことを記憶されていますね。では、1991年以来、小中学校の学習指導要領や、もっと目に見えるもので言うと、通知表の観点別評価が、一部の例外を除き、どの教科でも「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」というフレームで構成されていることはご存知ですか？

まず、小中学校の評価基準と大学の評価基準がいずれも「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」と同じであることに違和感を覚えませんか？　大学生に即した学びの「評価基準」があるのではないでしょうか？　次に、どの分野（学部）でも「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」が評価基準というのはどうですか？　学問（学部・学科）に即した「評価基準」があるのではないでしょうか？

この評価基準が、だれによって、どういう知的な手続きで提唱されたかをわたしは知っていますが、学問的には教育評価に関する学説のひとつとして認知されているだけで、あらゆる学校階梯、あらゆる専門分野において妥当な教育評価法だと評価されたとは、聞いたことがありません。

さて、学習指導要領の改訂作業が進められていますが、大学も無関係ではありません。大学に対するさまざまな「注文」も学習指導要領の改訂にかかわる考え方も同じだからです。学習指導要領の改訂にかかわるキーワードのひとつをみてみましょう。表題にある「コンテンツベースからコンピテンシーベースへ」がそれです。聞きなれないことばかも知れませんが、意味は簡単です。「知識・技能」を教えられるという学習から、コミュニケーション能力、情報収集・探索能力、役割把握能力、計画実行能力、選択能力、課題解決能力等々を身につける学習へという意味です。アクティブラーニングをさせようという主張と同じですね。教科に固有の、ということは学問に固有の「知識」を身につけることよりも、どの教科にも、つまりいかなる学問分野であっても通用する上記諸能力にかかわるスキルを身につけさせようというわけです。だから以前述べたように、アクティブラーニングは、学生がアクティブになる学びではなくて、これらの諸能力を使うアクティビティを教える学びです。教育内容が教科固有（学問固有の）知識・技能というコンテンツから、教科横断的（学問横断的）なジェネリックスキルというコンピテンシーに変わっただけであって、学生は教育内容を教えられる客体であることになんら変わりはありません。学び手がアクティビティとスキルに意味を認めなければ、その学習はパッシヴラーニングです。

1991年というのは、この考え方が提示された年でもあるのです。いろいろな大学のHPから3ポリシーを見てみると、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」をこの順序で記載している大学、順番を変えている大学、無視している大学があります。通知表の観点別評価の欄はこの順序なのですが、ランダムに並んでいるのではなくて、重要な順に並べられています。そう考えると、教育課程行政は、25年かけてコンテンツ軽視を小中学校から大学へ拡張してきたこともわかります。大学の「学校化」がとまりません。大学の大学らしさを大学が主張すべき時期ではないのでしょうか。

今年度の教員採用試験対策について

教職課程センター運営委員　橋本洋治

本年度は、4年生を対象にして「春講座」（3月28日）「1次直前講座」（6月25日）、「2次直前講座」（8月6日）を開催しました。特に、新たな取り組みである新4年生対象「春講座」では、採用試験全体の傾向と対策のレクチャー、体験講座（集団面接・集団討論・個人面接・論作文）を実施しました。受験に関する知識の習得はもちろんのこと、学部を越えて多くの学生が集い、受験本番を迎えるにあたってのモチベーションの向上にも役立ったものと思われます。

また、より早期からの受験準備を意識して、3年生を対象にスタートアップ講座（美浜キャンパス6月9日、東海キャンパス6月30日）も開催しました。なお、12月にはステップアップ講座及び合格体験報告会を同時開催予定です。3年生以下の皆さん、是非ご参加下さいね。

教員採用試験二次対策講座を受講して

子ども発達学部　子ども発達学科　学校教育専修4年　山本彗太

大学では、教員採用試験に向けてさまざまな取り組みを行ってくれた。今回参加した教員採用試験二次直前対策講座もその中の一つである。私がこのイベントで一番大きな収穫だったと思っていることは、新たな仲間との出会いである。

教員採用試験二次直前対策講座では、午前の部と午後の部がある。午前の部では、山口先生に一次試験を踏まえての傾向と対策を教えていただいたり、卒業生の方から私たちに近い視点からのアドバイスをいただいたりできた。この時期は、一次試験の結果を待っているという時期であり、自分自身少したるんでいたので、やってやろうという気持ちになれた。午後の部では、模擬授業、場面指導、集団討論、個人面接のなかから、学生が選んだブースごとに集まり、それぞれ練習を行った。

ここで重要だったことは、学生がランダムでグループに分かれるということだ。愛知県は一次試験で面接があることもあり、私は学校教育専修の仲間たちと自主ゼミを組織し、面接練習を行ってきた。面接練習は回数を重ねてくると、だれがどんな思いをもって、何が伝えたいのかがわかってくる。と、同時にアドバイスもだんだん同じようなことしか言えなくなり、マンネリ化しているような状態であった。しかし、ランダムでグループに分かれたことにより、心理臨床学科の仲間と面接練習をすることができた。心理臨床学科の仲間の意見は、私たちの自主ゼミではあまり考えることがなかった障がい児に対しての支援方法や、特別支援学校がどうあるべきかなど、専門的な事を話していた。心理臨床学科の仲間ができたことにより、学校教育専修でわからないことは、心理臨床学科の仲間に聞けるようなつながりができた。このつながりは、私にとって相当大きなものとなった。自分が勉強していない分野も、仲間の意見を聞くことで、深めることができたからだ。

私自身の大学生活を振り返ると、たいして勉強をしていないし、専門的に学んできたこともなく、面接で自分を売り出せるようなポイントはなにもなかった。しかし、仲間と過ごす時間はとても大切にしてきた。たくさんの仲間とかかわるからこそ、新たな考え、新たな知識が増えると実感した受験期間であった。3年生のみんなには試験期間までまだ時間がある。まずは、仲のいい仲間とどんな教師になりたいか、なにを悩んでいるのかなどを話し合うことから、輪を広げていってほしい。

合格体験記　愛知県・神奈川県（小学校）

子ども発達学部　子ども発達学科　学校教育専修４年　鈴木麻友

私は神奈川県と愛知県を受験しました。愛知県出身なのになぜ神奈川県を受けたのかというと、理由は一次試験が筆記だけだったということです。私はなかなか勉強に身が入らず、自分の中で「今まで習ってきた内容だし、試験は中学で習う範囲までだから大丈夫だろう」という自信がありました。そんな簡単に教採が受かるわけではないというのを知っていながら勉強が手につかない状態だったので、少しでも勉強をしなければならない環境を作ろうと思い、あえて一次試験に筆記しかない神奈川県を選びました。

私が本格的に筆記試験の勉強を始めたのは５月に入ってからです。これを聞くと遅く感じると思います。それまでは参考書をぱらぱらとめくることはあっても頭には入ってこない状態でした。私自身、今思うともっと早くから取り組むべきだったと感じています。また、私は４年生で中学校の教育実習も行かせていただいたので５月から始めたといってもほとんど勉強はできず、実習が終わってからようやく本腰を入れたことを覚えています。

３年生のときから１日何時間も勉強している仲間がいたことや、二次に向けて仲間と面接練習をしたときの仲間の知識量の多さに毎回圧倒させられ、刺激をもらっていました。勉強を毎日続ける仲間の様子を見ることや、自分の意見を言い合ったり面接を互いに評価し合ったりすることで、私も頑張らないと、という思いがだんだん強くなったからこそ、最後まで頑張れたのではないかと思っています。

私は直前に追い込まれてからやっと本気になる性格なので神奈川県の試験までに完全に範囲をおさえることは難しかったですが、学校に夜９時まで残る習慣をつけたり、仲間と教え合ったりすることで学習の印象を残すという学習方法を行っていきました。要領よく学習するため、たくさんの教材を使用するのではなく一つに絞ることと、苦手分野を中心に取り組むことにし、あとは直前にどれだけ詰め込めるかで挑みました。無事に一次試験を通過すると、二次試験は模擬授業と集団討論、個人面接があります。その中でも模擬授業がすごく大変でした。授業の冒頭の10分を行うなかで、子どもが面白いと思える授業をしたいという思いをどうやって表せばいいのか、たくさんの案を練ったことを覚えています。神奈川県の一次が受かった仲間に授業を見てもらって意見をもらい、自分の考えを話すことで短い期間の中で濃いものができたと感じました。やはり仲間がいたからこそできたことだと感じています。また、仲間も同じように不安を抱えていることを知り、勉強の合間におしゃべりをして息抜きすることを忘れないことも大切だと思います。それが結果として教採合格に結びついたのだと感じています。

合格体験記　東京都（小学校）

子ども発達学部　子ども発達学科　学校教育専修４年　大橋紀博

私は東京都の教員採用試験を受験して合格しました。受験方法は大学推薦という方法をとりました。大学推薦を頂くことにより東京都の場合、一次試験が免除になり、二次試験のみで合否が決められます。東京都の二次試験は、面接試験のみですが指導案を作成する必要があります。

さて、ここからは当日の流れについて話させていただきます。会場校は一校で、集合時間は様々あるようです。待機室には、面接官がびっしりと並んでおり、とても緊張感漂う空間でした。

次に面接試験についてです。面接は他の受験生が前後に控えているため、ぴったり30分で行われます。受験生1名に対し、面接官3名という形で行われます。受験生と面接官との距離は机をはさんで3メートルほどあったため、とても圧迫感がありました。面接官にも役割があるようで、1人目は私が書いた面接表を基に質問をされ、2人目は私の指導案についての質問、3人目は教育問題など書類以外のことについて質問されました。

「30分なんて長い」と感じると思いますが、緊張感などであっという間に終わってしまいます。この時間内にいかに自分の長所を言えるかが大切だと思います。勿体ぶることなく、長所を言える質問に自信をもって応えることです。

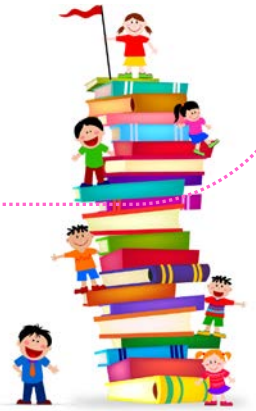
教員採用試験で合格を手にするには、自分一人の力では通用しないということを受験生一同痛感しています。学科試験の勉強ももちろん大切ですが、それ以上に面接試験の練習は重要です。友人と協力して行うことによって、より実践的に練習することができ、練習すればするほど上手くなれるものです。はじめは自分の長所や短所を他人に言うことに、恥ずかしさや抵抗がありますが、それを乗り越えてこそ合格が見えてくると思います。

最後に、私が受験勉強の際に意識していたことを三つ紹介します。一つ目は、日記をつけることです。これは数行でも一言でもいいので毎日続けてほしいと思います。その日その時にしか、もてない感情がありますが人はそれを忘れてしまいます。その日に感じたことを日記で残すことが、面接試験の時に大きく活きてきます。

二つ目は、リラックス方法をつくることです。私は部活動をしていたこともあったため、音楽を聴きながらのランニングが一番のリラックス方法でした。リラックス方法に関しては、たくさんあるに越したことはありません。リラックス方法を見つけることも「自分を知る」という意味で、面接試験へのプロセスになっていると言えるからです。

三つ目は、自分に似合ったルーティーンをつくることです。朝一に集中できる人もいれば、夜中の方が集中できる人もいると思います。そこに関しては常識に捉われる必要はないと思います。自分の体に関しては自分が一番よくわかっているはずですからね。

以上で私の合格体験記とさせていただきます。



合格体験記　岐阜県（特別支援学校）

子ども発達学部　心理臨床学科　障害児心理専修４年　後藤彩

私は、奈良県と岐阜県の教員採用試験を受験し、岐阜県の特別支援学校で合格することができました。教友ゼミのフィールドワークに参加してから、「教師になりたい！」という思いが一層強くなりましたが、本格的に勉強を始めたのは３年生の春休みでした。周りが真剣に勉強を始め、気持ちが焦っているなかのスタートであったこと、私自身が今までにこれといった受験勉強をしたことがなかったことから、「どうしたらいいのかな…。」という不安でいっぱいでした。

■ 筆記試験対策

過去の先輩方の合格体験記を読み、最小限のテキストで勉強をスタートさせました。

（使用したテキスト）

①奈良県・大和高田市の特別支援学校教諭　（協同出版）

②奈良県・大和高田市の教職・一般教養　（協同出版）

③２０１７年度試験完全対応　教員採用試験　速攻の教育時事　（実務教育出版）

④全国版　特別支援学校教諭の精選実施問題（協同出版）

奈良県は、教職教養と特別支援教育の専門試験のみだったので、特に①を重点的に、①と②を繰り返し解きました。また、教職教養の中でも教育時事の比重が高かったので、集中力がきれてしまったときや電車での移動中に③を眺めていました。

岐阜県は、教職・一般教養、特別支援教育の専門試験の75分マークシート形式。専門試験は学習指導要領中心の出題であるため、④の学習指導要領の部分を繰り返し解きました。

協同出版・時事通信社の模試も受けて、間違えた問題はすぐに解き直しました。

私は図書館や家などで一人で勉強すると、やる気が途切れてしまうため、ほとんど「教職課程センターの面談室」で勉強をしていました。受験する自治体は違っても、仲間がいて心強く、先生方とも話ができるうえに飲食もできるので、夜遅くまで大学に残り勉強をしていました。図書館が閉館している休日は気分転換に、喫茶店にこもって勉強をしていました。

■ 口述試験対策

「面接練習やらない？」と、４年生になると学科を越えて多くの仲間から声をかけられるようになりました。ですが、周りはもっと前から練習を重ねていて、私は初めのころ簡単な質問項目でさえ答えられず、たくさん涙を流しました。まずは自分だけの面接ノートを作り、自分と向き合い、長い文章ではなく箇条書きで書いていくことをオススメします。面接は誰でも緊張します。まずは質問に対して30秒程度で答えられることを目標にしましょう！！！

■ 最後に

①　最新の教育ニュースにアンテナを張ること

「教職課程」「教員養成セミナー」「教育新聞」は、図書館や教職課程センターに置いてあります。購読するとお金もかかるため、重要な項目はコピーするのがオススメです。

②　無理をせず、息抜きにボランティア活動・サークル活動に参加をすること

毎日机に向かって勉強してばかりではなく、子どもとかかわる時間も大切にして下さい。

③　志望する自治体はちがっても「仲間」を大切にすること

口述対策は、決して一人ではできません。多くの仲間と励ましあい練習を重ねて下さい。

合格体験記　神奈川県（特別支援学校）

子ども発達学部　心理臨床学科　障害児心理専修４年　亀山健太

私が教員採用試験に合格することができたのは、何よりも周りの人の支えがあったからこそだと、胸を張って言うことができます。

私は教職課程センターに三年生の１２月頃から通い、仲間と共に勉強し続けました。毎日勉強していると辛くなり、諦めたくなることが何度もありました。しかし、そんなときに私を支えてくれたのが一緒に勉強している仲間の存在です。一緒に教員採用試験を受ける友達は良きライバルであり、同時に同じ志を抱く仲間でもあります。敵対意識を持つのではなく、お互いに切磋琢磨しあいながら成長することが大切です。これから教員採用試験の勉強を始めようと考えている人はたくさんいると思います。同時に、勉強を始めようにも、どうやって勉強をしたらいいのかわからない人も、たくさんいると思います。実際、私も初めは勉強をしようとしても何をすればいいのかわからず、時間だけが過ぎていました。そんな時こそ、自主ゼミを立ち上げ、仲間と一緒に考えてみてください。それが合格のための第一歩であると私は身をもって体験しました。自分から声をかけるのはなかなか気恥ずかしいことだとは思いますが、ぜひ第一歩を踏み出してみてください。

どんな人にも得意不得意があります。私は塾でのアルバイトをしていることと、元々の明るい性格もあって、学校教育の基本的知識の問われる一般教養と、その人の人間性が問われる面接には多少なりとも自信がありました。ですが、字が汚いこと、文章を構成することが苦手ということから、論作文がどうしてもうまくいかず、何度も一人で書き直していました。何度書いても自分の中で納得のいく文章を書くことがでず、路頭に迷っていたのですが、この問題を解決してくれたのも仲間の存在です。同じ題目で論文を書き、一緒に論作文を添削し、文章の構成や内容を討論しました。また、CDP講座や教友ゼミにコツコツと参加していたこともあり、大学の先生と仲良くなり、論文を添削していただくこともできました。そのおかげで、論作文試験のある神奈川県で合格することができたと私は感じています。論作文だけでなく、面接や集団討論の練習も仲間と繰り返したのを、つい昨日のように感じます。

長くなりましたが、まずは本腰を入れ、仲間を集めること、自分の得意不得意を見つめ、日々努力することができれば、教員採用試験に合格することは十分可能です。また、合格するためにではなく、自分の大好きな子どものために、将来出会う子どもたちのためにと思えば、辛いことも何とか耐えられると思います。これからの試験勉強、とても大変ですが、やりがいは十二分にあります。身体を壊さない程度に、ときにはしっかりと休みつつ計画的に頑張ってください。皆さんの努力が報われることを信じて、応援しています。

卒業生からのたより

生徒に寄り添い、頑張っています！

2012年度　国際福祉開発学部　国際福祉開発学科　卒業
東海市立横須賀中学校教諭　酒井宏樹

なぜ中学校教諭？

今年でいつの間にか社会人5年目を迎えました。大学生の頃から考え方や環境など様々なことが変わりましたが、いくつか変わらずにいることがあります。その中の一つに、なぜ「中学校」の先生をしているのかがあります。私が中学校教諭として働いている理由は、大学生の頃から変わらず「私自身が中学生活3年間で人として心身ともに一気に成長した時期で当時の先生たちに成長を助けてもらいました。だから私がしてもらったように、この時期の生徒達の考え方や感情の変化に寄り添いながら成長に関わりサポートしたいと思っているから」です。

3年間を通しての成長

社会人になってから2つの学校に勤務し2年目までに様々なことを学びました。そして2年前に初めて担任として新1年生を受け持つことができ、翌年には2年生の担任として、今年は3年生の担任として働いています。幸せなことに、今の3年生の生徒たちと一緒に学年をあがることができ、3年間の成長を見届けることが出来ています。そして、この5年間の中で、今年が一番多く生徒たちに感動させられています。

中学1年生のころ、具体的に細かく教えてあげなければ行動ができなかったり、声を荒げて厳しく指導しなければ行動が変わらなかったりという状態だった子どもたちが、2年生3年生と学年があがるにつれ、「こんな学年になってほしい」「こんな人間にはなってほしくない」など思いを伝えることで行動や言動が変わるようになってきたのです。

今までの自分たちの指導の中で自分たちがかけた言葉にどれほどの影響力があったのかはわかりませんが、生徒が心身ともに立派になってきていると感じられたとき、嬉しい気持ちが溢れてきて、つい笑顔になってしまうことがあります。

自慢のクラスともあと少しでお別れ

10月にあった体育祭では、私のクラスは最初から最後まで競技者を控え席から応援したり、競技から帰ってくる人たちを拍手で出迎えたり、失敗をしてしまった子や上手く出来なかった子に「よくやってくれたよ。切り替えよう！」や「次の種目で俺らがどうにかするよ」などの言葉をかけたりする姿がありました。最近クラスで過ごしている中でも「あったかいクラスになってきたなぁ」と皆の表情を見ていて思うことが多くなりました。

しかし、そんなクラスと一緒に過ごせるのもあと数ヶ月になりました。一年の友が一生の友になるように、今のクラスの担任として卒業までの残りの時間をクラスの生徒たちのためにサポートしていこうと思います。

「教える専門家」というより「子どもとともにある専門家」だと実感

2015年度　子ども発達学部　子ども発達学科　初等教育専修　卒業　虎谷汐莉

私は、本年３月に日本福祉大学を卒業し、故郷である石川県で小学校の教師をさせていただいています。新しい環境の中で、日々、戸惑うことや失敗することばかりですが、それでも子どもたちの笑顔に囲まれて、充実した毎日を送っています。

私にとって、日本福祉大学で学んだ４年間は、授業はもちろんことサークル活動、県人会、仲間との交流など、どれもが、今の自分の生活に活かされていると感じています。その中でも、特に感じるのがゼミでの学びです。以前は、教師というのは教え方に係る専門性が大切だと、私は思っていました。もちろん、教師にとって勉強を教えるという専門性は必要不可欠です。しかし、ゼミでの学習を通して、教える専門性だけでは不十分であり、子どもをまるごと見取り、その子に必要な支援をしていく力が必要であることを学びました。つまり、単に子どもたちの表面に見えるものだけではなく、その奥にある様々な家庭環境の状況や人間関係等の背景までを読み取り、必要な支援を選択し実行する力です。今の社会では、子の貧困や親の離婚、いじめなど子ども達が関わる問題をよく耳にします。背景には、子ども達の生活環境の変化が以前と比べ、一人ひとり大きく違うことにより、苦しみを抱えている子が増えていると感じます。だからこそ、その子に必要な支援をしていく力があることによって、子ども達の安心が生まれるのではないかと考えています。この学びがあったからこそ、子ども達と生活を共にしている今、もし泣いている子が目の前にいたら、泣いているという目に見える事実だけではなく、家庭でうまくいっているのか、友達とうまくいっていないのではないかなど、子どもの背景にあるものを読み取り、その子にとって今何が必要なのか、今、何をしてあげるべきなのかを考え、子ども達と接することができるようになりました。慌ただしい学校現場では、毎日、目の前のことで精一杯になることもありますが、この学びは自分が教師をしていくうえでの軸となっています。

日本福祉大学では、教育実習だけでなく教職インターンシップがあったり、児童ボランティアサークルも多くあったりと、子ども達と関わることができる機会が多かったのが、良い経験となりました。教職インターンシップでは、子ども達の登校時から下校時まで、クラスに参加させていただきました。一日中、子ども達と一緒に過ごす機会はとても貴重で、子どもの繊細な面や素直な面を、身をもって感じることができました。また、先生方のお姿から子どもへの関わりや、支援方法を学ぶことができました。先生方は子どもをまるごと見取り、一人ひとりに合った必要な支援をできる限り行っていました。ゼミで大切だと学んだことを現場で見ることができ、見取りの方法や支援の方法を具体的に学ぶことができました。その学びは、現場に出た今、私の一つの引き出しとなっています。

その他にも、児童ボランティアサークルでは、チームとして子どもを見取っていく必要性を学ぶことができました。サークルでは、活動が終るごとに反省会が開かれ、一人ひとりの子どもの様子についてサークル員全員で振り返り、次の活動ではどんな関わりをしていけば良いかを話し合っていました。サークル員一人ひとりの小さな気付きを共有することで、時には大きな発見となり、次の支援方法が見えることもありました。学校現場でも同じように、チームとして子ども達を支援しています。私はこの学びがあったからこそ、現場に出た今も、些細な事でも、情報や気付きを共有していこうという意識を常にもつことができていると思います。

これからも、日本福祉大学で学び得た軸を大切にし、目の前の子ども達と一緒に成長し続けていきたいと思います。

高等学校の教員になって

2015年度　国際福祉開発学部　国際福祉開発学科　卒業
中野学園オイスカ高等校教諭　阿部智弘

私は現在、静岡県内のオイスカ高等学校で英語科教諭として働いています。オイスカ高等校では、天地自然の恩恵によって生かされていることへの感謝の心を持つ、心豊かな生徒の育成に取り組んでいます。また、失われつつある日本の良き心を呼びさまし、人間や他の生命が共生する「ふるさと」に根付く、若き国際人の育成を熱心に行っています。勉学、部活動、国際交流にと元気あふれる高校です。この学校に4月から働いてあっという間に半年が過ぎてしまいました。私は中学生の時に、英語の教師という職業に憧れました。しかし、高校生になり今まで好きだった英語が嫌いになりました。それでも進路選択の時には、教員免許がほしかったので国際福祉開発学部に入学をしました。その後中学生の時に感じた英語の教師への憧れが再燃しました。そして、今年から高等学校で英語の教師をしています。

私が初めて教師になった4月、今まで味わったことのない緊張、不安に襲われました。周りの先生方とうまくやっていけるだろうか、生徒に教育ができるのだろうかなど弱気になっていました。しかし、緊張しながらも生徒と触れ合うことで次第に自分にも余裕が出てきて、楽しいという実感を持てるようになりました。余裕が出てくると、周りに気配りができるようになりました。周りを見ることができるようになったとき、私は大学生の時に教職の授業で学んだ、「教員の仕事の中で授業は氷山の一角だ」という言葉を思い出しました。4月・5月の2ヶ月は自分の事で精一杯になって授業のことしか頭になかったということに気づいたのです。

仕事に慣れ始めた6月、授業以外でも生徒指導、問題があったときの対応、テスト作成、学校運営に関わること、寮勤務、部活動、もちろん教材研究もしなければなりません。それ以降、必死に周りの先生方、生徒に迷惑がかからないよう、仕事に没頭しました。このことは夏休みが終わった2学期からも続けています。

これらのことを続けていて今感じていることは、教師は、授業では先生になり、生徒を叱らなければならない時には、生徒の親に成り代わり、生徒が落ち込んでいる時にはカウンセラーのようになり、部活動ではコーチになります。これらのことをできるようにするには、幅広い知識がなければできません。まだまだ知識、経験のない私は毎日が勉強で毎日が修行だと思いながら、この仕事と向き合っています。私の勤務校の校長はいつも、「生徒の見本にならなければ指導、教育はできない」と話をします。まさにその通りだと感じるとともに、これから先も勉強をし続けて、1人前の教師となり、生徒に「この先生ならついていきたい」と良い影響を与えられるような教師になりたいと思い続け、努力をしていきます。

教師になって

2015年度　子ども発達学部　心理臨床学科　卒業　櫻木彩未

教師になって約半年が経ちました。私は今、特別支援学校の聴覚部門、中学部9名の生徒の副担任をしています。ほとんど手話を知らない状態からのスタートでしたが、生徒たちや　聾の先生に教えてもらい、今では手話と音声を使いながら授業ができるほどになりました。毎日、様々な問題やハプニングは起こりますが、充実した日々を過ごしています。

私の学校は、習熟度別に学習グループが三つに分けられています。通常の中学校と変わらないレベルのグループ、教科書の内容をかみ砕いて進めていくグループ、重複の生徒が在籍するグループがあります。私は一年生から三年生までの9つあるグループのうち、4つのグループを担当しています。すべての授業の内容が異なるので、毎日の授業準備にとても苦労しています。しかも、耳からの情報が少ないため文章での表現が苦手な生徒が多かったり、ニュースなど日常生活でよく聞くような言葉を知らなかったりします。授業をするにしても社会的事象に関する概念が確立していなかったりすることが多いため、その言葉の説明から授業を展開しなければいけない場合もあります。その中でほとんどのグループが教科書通りに授業を展開しなければならないということにとても難しさを感じます。また、聾学校の生徒たちは独特の世界観があり、その世界観を広げるため時には生徒指導も必要になります。悩みは尽きませんが、私がこうして楽しく教員生活を送れているのは頼りになる教員仲間がいるからです。学校内でも学部や教科が違うだけで指導方法や授業方法が異なります。学外に出て部門が違えば、全く違う授業をしています。何が自分に合っていて、何が自分のもつ生徒たちに必要なのか真剣に模索し、さらには他の先生のアドバイスを求めながら学校生活を送っています。

最後に、学校の先生は授業をするだけが仕事ではなく、会計のような事務的な仕事をしたり、生徒指導や職員室での人間関係など様々な悩みを抱えることがあると思います。そんな時は、大学の友達や先生、同期、同じ職場の先輩に話すと気持ちが楽になります。話す中でいい解決方法が見つかったり、そこでの情報交換が後々いい結果に繋がったりもします。一人で考え込まず、人に話すことで分担できる仕事もあります。生徒に関わる教員が人間性豊かでなければ生徒たちも豊かに成長することは難しいと言われました。教員は心身の健康が第一だと思います。悩みも喜びも共有できる皆さんと一緒に働けることを日々を楽しみにしています。

教育実習で学んだこと　小学校

子ども発達学部　子ども発達学科　学校教育専修４年　吉原直弥

教育実習は教師を目指すうえで、とても貴重な経験になったと思っています。いままでインターンシップでしか知らなかった学校の内部を一カ月かけてじっくり見ることができました。

学校の教師の一日は自分が想像していたよりもハードなものでした。朝は毎日7時半に学校に着いていましたが、自分がつく前に既に数人の先生方が仕事をしていました。自分はというと着いたらまず教室に行き、子どもたちのために教室の掃除をしました。子どもたちが着たら校庭に出て遊びました。そこから朝の会をやり授業を行いました。20分間の休み時間や昼の休み時間は子どもと一緒に外に出て走り回りました。給食の時間や下校の時間も子どもたちを指導していました。6時間の授業が終わった後は部活動の指導があり、それが終わって17時にやっと自分の仕事に取り掛かるといった感じでした。ハードな環境の中でしっかりと仕事をこなし、さらに授業をこなす先生方の精神力はとても強いものだなと思いました。

自分が教育実習で一番大事だと思ったことは、子どもたちと関わる時間です。朝の授業が始まるまでの時間、授業と授業の間の時間、給食、掃除の時間、長い休み時間など、子どもたちと関わることができる時間は積極的に関わるようにしました。まず教育実習生としてしなければいけないことは、子どもたちとの信頼関係を作ることです。信頼関係はとても大事なもので、自分が授業をした時に積極的に発言してくれるなど、1カ月の教育実習を楽しく過ごせるか過ごせないかに大きく関わってきます。自分の場合は休み時間に外で一緒になって鬼ごっこやサッカーなどをして体を動かしました。一緒になって体を動かすことで子どもたちと次第に打ち解けることができたような気がします。人それぞれ得意なことがあると思うので、それを活かして子どもたちと打ち解けていけばいいと思います。

授業づくりは実習前に事前に準備しておくといいです。事前打ち合わせの時に自分の担当する学年と担当する教科の範囲を聞いておくと、実習が始まる前に準備をすることができるのでお勧めします。実習が始まってからは、遅くまで学校にのこって授業を作ってもいいが、集中できない人は早く家に帰って集中して取り組んだ方が効率はいいと思います。研究授業に関しても同じで事前準備をしておくことが大事です。

教育実習では大学の授業では学ぶことができないことが沢山学ぶことができます。この1カ月を何も考えずに過ごすのと、少しでも自分の力にしようとして過ごすのでは、実習が終わった後で大きな違いがあります。本気で教師を目指すのであれば、謙虚な気持ちを忘れず、全力で一つ一つに取り組んでください。

障害児教育実習で学んだこと　特別支援学校

子ども発達学部　心理臨床学科　障害児心理専修4年　鈴木将太

私は、静岡県の特別支援学校で実習をさせていただきました。特別支援学校は、見学や弟の関係で行ったことしかなく、2週間の教育実習で多くのことを学ぶことができました。

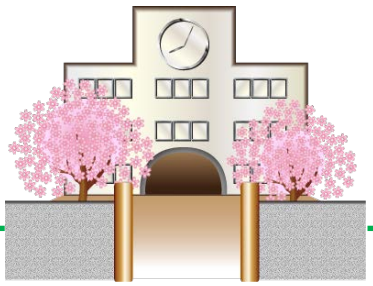
まずは、生徒のことをよく観ることが大事です。知肢重複クラスを担当したので、子どもたちから何かを発信するということが難しいという子がほとんどでした。そのため、表情から生徒の感じていることや発信したいことを読み取るということが大切でした。だから、生徒の顔をよく見る、目線を合わせることが大切だと指導教諭からアドバイスをもらい、その重要さを2週間で痛感しました。

そして、生徒との信頼関係を構築することが大切です。クラス担当の先生からもそのようなご指導をいただき、生徒と遊ぶ時間も多く設けてくださいました。生徒が横になって休憩しているときに一緒に歌を歌ったり、言葉遊びをしたりして楽しみました。毎日続けているうちに生徒のほうから近寄ってきてくれるようになりました。とてもうれしい気持ちになり、授業でもよりコミュニケーションが取れるようになりました。信頼関係を築くことができたかなと改めて感じました。

また、教師同士の連携がとても大切です。特別支援学校では、ほとんどすべての授業をティームティーチングで行うためです。教師同士で相談したり、検討しあったりして、生徒の状況を客観的に分析しています。そのうえで、どのような指導を行うことが生徒にとって良いのかを考えます。それをもとに教材を作成していきます。だから、生徒の細かな情報も共有し、活かすことができるようにすることが重要です。私自身研究授業の際に、共有がきちんとできていなくて当日バタバタしてしまいました。バタバタしてしまうと生徒たちも混乱してしまい、落ち着いて学習するというような状況ではなくなってしまいます。教材研究、教材づくりはもちろんのこと、学習環境をきちんと整備するということが大切だと学びました。

全体を通して、自分自身の知識の無さを痛感しました。知肢重複の子どもと関わったことが無かったということもありますが、肢体不自由の部分の知識が足りず、車いすからベッドへの移乗やストレッチの仕方、食事介助などがうまくできませんでした。また、これらは一人ひとり少しずつ異なることで、テキストに書いてあるとおりにやればうまくいくというものでもありません。

研究授業では、生徒の表情を読み取り、その反応を全体にフィードバックすることの大切さを学びました。フィードバックをしないと集団での学びの価値が下がってしまいます。教師とその生徒とのやりとりで止まってしまうとほかの生徒たちは、何もしない時間になってしまうのです。それを避け、みんなで勉強しているということを感じてもらうためにも「いま、教室で何が起きているのか」を共有することが必要です。どんな校種に配属されるか分かりませんが、この実習で学んだことを生かし、一生懸命取り組んでいきたいと思います。



教員という仕事の「大変さ」と「面白さ」　高等学校

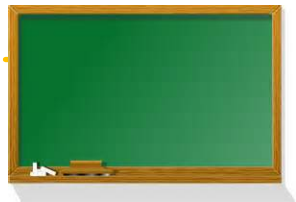
経済学部　経済学科4年　阿部和利

「教員になりたい」と考え始めてから、はや７年が経ちました。日本福祉大学に入学して私自身の夢を叶えるために日々精進し、教職課程の授業も大詰めを迎えた中、ついに教育実習という実践の機会がやってきました。母校での実習と言う事もあり、ワクワクや懐かしさを感じつつも教員という立場で生徒と接していく事に対して「うまくやれるだろうか」などの不安や緊張がありました。しかし、様々な先生方や生徒たちと出会い、3週間の短期間で多くのことが学べました。その中で特に印象に残った2つの事を紹介します。

まず1つ目は「いかに生徒のことを考えて授業を作り、教えていくか」です。一見簡単なように見えたこの作業、実はとても奥が深く、難しいものであるという事を痛感しました。限りない教材研究、生徒を授業に集中させるための技、生徒の印象に残る話し方など大学の講義では学び切れないものが多数あり、貴重な経験ばかりでした。指導してくれた先生は「教材研究に終わりはない」と言う事を大切にしてほしいと教えられ、「これくらいで良いだろう」と手を抜いた時点で良い授業は作れないという事も再認識することが出来ました。また、社会科という事もあり、覚える範囲が広い中で教員も教科書だけでなく、資料集や様々な文献を学習・研究して積極的に授業に活かすべきであると考えました。

2つ目は「担任教員や引率としての責任の重さ」です。私が実習期間中に縁あって、サッカーの全校応援や校内陸上競技大会、高校総体期間中による教職員の不足で担任としての業務や生徒の引率などを行いました。その際、朝のHR等で、生徒が混乱なく行動できるように連絡事項や予定確認を行い、必要があれば板書や生徒にメモを取らせる、また現地では生徒の体調管理や観察なども行って常に気を配って生徒が最高のパフォーマンスが発揮できるように配慮するなど、生徒からの視点では知ることが出来ない事も経験しました。教員としての責務を痛感すると共に、担任として生徒を引率する事は決して簡単ではなく、ここでも「生徒のために何をすることが最善なのか」と言う事を考えなければならないと学ぶことが出来ました。

ほかにも教育実習で学んだことは多くあります。失敗したことや辛かったこともありましたがこの実習を経験したことで、生徒と関わることの楽しさ、授業を作って生徒の「分かった」が聞けることへのやりがい、そして、何よりも生徒の笑顔を見ることが私にとって最大の嬉しさでした。「生徒のため」を追求し、教員という仕事の「大変さ」と「面白さ」を経験したこの3週間という実習期間は私にとって、とても良いものとなりました。次に教壇に立つときは、今よりもさらにスキルアップして生徒から信頼される、そして「生徒のために何が出来るか」を考えることが出来る教員を目指して、残りの学校生活を過ごしていきたいです。



教育実習体験　中学校

子ども発達学部　子ども発達学科　学校教育専修４年　河合春奈

私は地元の中学校へ2週間の実習をさせていただきました。教科担当の先生をはじめ多くの先生方から教師のあり方、授業等のアドバイスをいただきました。

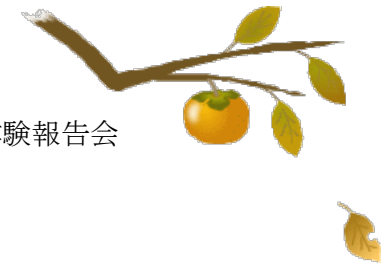
中学1年生の社会科を担当しました。中学1年生ということで中学校へ入学してまだ2か月しか経っていませんでしたが、クラスの雰囲気はとてもにぎやかでした。

私が実習の中で一番大事だと思ったことは「生徒理解」です。小学校とは異なり、中学校は実習期間も短く、また担当するクラスの生徒と過ごす時間も少ないため、挨拶はもちろん積極的に会話をしていきました。会話以外でも生徒日誌というものがあり、4行程度の中で生徒の悩みだったり、今日１日の出来事だったり、さまざまなことが書いてあり、それを読み、コメントを書くことで生徒のことをよく知ることができました。授業では1学年全てのクラスを見させていただきました。クラスによって雰囲気も異なれば発言することも違います。生徒が社会科に対してどう思っているのかを理解しておくことで発問や授業形態なども変わってきます。「生徒理解」を十分に知ることで、苦手な生徒の興味を引くような話題であったり、生徒の日常生活の中から話をつなげたりすることも一つの工夫だと思います。

研究授業では地理で世界の気候区分についてやりました。「生徒理解」から私のクラスは社会が好きな生徒が多いが、地理に対しては苦手意識をもつ生徒もいることがわかったため、視覚的な教材を多く用いることを重視し、グループ学習で気付いたことや思ったことを言える雰囲気づくりをしました。グループの中での役割は固定せず、一つのルールとしてみんなで協力することを伝えました。授業にみんなが参加できるようしました。また、インプットしたこと（学んだこと）をアウトプットさせること（相手に伝えること）で自分の知識として確立するためまたインプットすることを心がけました。50分間の授業はあっという間でしたが、得たものやもう一度考え直すところが多くありました。しかし生徒全員がしっかりと私の伝えたことを守り、授業を受けてくれたことにとてもうれしく思い、「生徒あっての授業」だと思いました。

今回実習に行って、正直大変なこともありましたが、思い返すと全ていい経験となりました。部活動や陸上練習と学年を超えて多くの生徒と関わることができました。そして私は偶然にも中学時代お世話になった先生がいらっしゃったことから、安心して実習に挑むことができました。また最後の実習記録に教務主任の先生から、「次は同僚として待っています。」というコメントが書いてあり、より教師への思いが強くなりました。今まで出会った先生方と同じ職場で働けるように日々前進し、これからも教育実習での経験を生かしていきたいと思っています。

今後の予定



3年生・2年生 対象

教員採用試験対策ステップアップ講座および教員採用試験合格体験報告会

2016年12月15日（木）13：25～18：00　美浜キャンパス

※詳細および開催場所は改めてnfu.jp掲示板で告知します。

1年生 対象

教職課程オリエンテーション

2016年12月15日（木）3・4限　東海キャンパス

2017年3月28日（火）4・5限　美浜キャンパス・東海キャンパス

教職課程登録期間

3月下旬を予定